



Title	1990年代の台湾文化空間における「日本」：翻訳書の受容に見られる主体性
Author(s)	許, 均瑞
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44854
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	許均瑞
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 18054 号
学位授与年月日	平成 15 年 6 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	1990 年代の台湾文化空間における「日本」一翻訳書の受容に見られる主体性一
論文審査委員	(主査) 教授 西口 光一 (副査) 教授 沖田 知子 教授 仙葉 豊

論文内容の要旨

1990 年代、日本の視聴文化財（テレビドラマ・ポップミュージック・アニメなど）が台湾で大人気を博し、文化空間においても日本ブームを巻き起こした。日本ブームと称されるこうした日本大衆文化の流行は、植民地時代の歴史を背景とした〈支配/被支配〉に代わる現在の日台関係を解説する新たな視点をもたらした。その理由は、単一商品の人気に止まることなく、関連企業への相乗効果が日本商品の消費を一層煽ることにある。しかしながら、日本企業は東アジアにおいて、文化の輸出に関しては「出遅れている」（岩淵功一『トランスナショナル・ジャパン』138-142）との指摘がなされている。現に日本大衆文化商品の進出に重要な役割を果たしているのは、主としてローカル側の企業であり、主にローカル側の企業が積極的にその市場を開拓しているのが実状である。ローカル側の企業が日本の文化商品を導入する必要性は何を表しているのか、導入される日本文化商品とローカル文化との混合が何を意味しているのかといった問題は、ローカル対グローバルの衝突という視点だけでは説明できない複雑な文化的現象であり、さらなる解釈が必要となっている。本研究はこうした問題意識のもと、90 年代の台湾において、日本の文化財が台湾市場に受容されるプロセスに注目するものである。

あくまでも台湾市場の需要に応じて導入され、解釈され、吸収され、再形成されるというように、台湾における日本文化商品のイメージと市場の構築は、主に台湾文化市場というローカルのメディアと企業に負っている。日本の文化商品を導入することは日本文化を広げるといふより、グローバルな文化現象との接近・接触という、台湾におけるローカル文化空間側での文化構成の問題となっていると考えられる。

西洋指向が依然として優勢である台湾において、〈日本発〉というフレーズの展開可能性には基本的に〈新しい観点として〉西洋以外の優位文化を代弁する意味合いが存在しているものの、大量に取り入れられることによってその差別的優位性は失われると考えられる。そこにナショナリズムに関する台湾の国際的立場問題を回避するため、グローバル化へ自ら積極的に前進する台湾の政治・経済地政学的な問題が浮かび上がる。アメリカの大衆文化を基調とする文化のグローバル化は、戦後の台湾においても〈新中間層〉の現れとともに、消費社会の熟成を通じてコスモポリタンのライフスタイルが実践されてきた。しかしながら、こうした文化の越境的な均質化現象は、アメリカ指向を打破した 90 年代の日本文化財の人気を台湾におけるグローバル化の問題との関連において再検討する方向性をもたらした。アメリカに次ぐ量の日本の大衆文化商品が市場に出回っていることは、台湾の文化空間における新しい時代

性の発展を意味している。アメリカのみならず多種多様の外来文化を導入することにしがたい、市場経済を根底とする諸文化財の生産・消費・受容によって〈台湾的な流行文化〉が形成される。外来文化財の受容を通じて、台湾内部が目指す〈世界的レベルの感覚・知識・文化の共有〉という追求は、台湾の文化空間のグローバル化として考えられる。しかしその反面、経済のグローバル化の傘下に収められることは、巨大多国籍企業の台湾市場への自由な進出を容認することを意味する。自ら外来文化財を導入することはグローバル化を意味しているのに対し、多国籍企業による外来文化財の導入はローカル性を失うことにつながるということが、台湾諸企業で強く意識されている。

そこで、台湾（ローカル）性を失わないため、台湾人による主体的な導入およびグローバル的な通用のために〈台湾ブランド〉を創出することが台湾の課題となる。アメリカへの追従にとどまらない、90年代の日本文化財の繁栄は、台湾の文化空間におけるグローバル的な変容が初めて具体的に観察可能となった現象でもある。それを明確に描くためには、グローバル化を求める台湾人のライフスタイルと知識概念の変化や市場経済の流れを追及しなければならない。本論文は文化装置の表出という概念の具体的実践を目指し、台湾の文化空間における外来文化財に対する言説の形成をめぐる、文化の混合現象について具体的な考察を展開する。文化・知識・経済のグローバル化への追求とローカル性の強調は主にローカルが主体的に進行させるという観点が本論文の中心となる。その関連性を明らかにする上で、90年代のグローバル化は決して均質化だけを意味しているのではなく、ローカル性の具現化も次第に強化されていくということを明らかにしたい。ここでは90年代台湾の文化空間におけるアメリカ以外の国の文化財の摂取が重要な関連性を表していると考えられる。すなわち、台湾内部の文化構成において、新しい概念やライフスタイルの生成は主にアメリカの文化財を参考にしてきた。そこで、日本の文化財が広汎に受け入れられるようになったという90年代の文化空間の大きな変動は、日本に対する眼差しの変化が生じていることを意味しており、グローバル的に通用する〈参考価値〉を日本の文化財に求めるといふ、ローカル性の創出を試みる台湾のグローバル化の一環として考えられる。

本論文の研究対象は、日本の文化財の導入に関して脚光を浴び続けてきた視聴文化財ではなく、台湾における日本の翻訳書の受容にシぼる。文字によって表現される翻訳書におけるような〈消費〉〈読書〉〈理解〉という消化作業の存在を具体化することは、視聴文化財の受容においては困難である。そのことから、知識や概念を表す役割を担っているという文字の特質に注目し、本論文は日本の翻訳書の受容を探ることによって、文化空間の外来文化財を取捨選択する際に存在する台湾内部におけるグローバル化のプロセスを追う。これまで日本の翻訳書の受容や消費の変化に対する社会の注目は少なかったが、90年代の日本現代文学ブームによって文化財の一形態として考察する必要性が初めて示唆された。

他の視聴文化財と違い、翻訳書の受容は中国語に訳す作業を経なければならないので、日本語からの影響を最小限に抑えることができ、植民地時代に日本語教育を受けていた日本語世代との関連性も最も稀薄と考えられる。テキストそのものと植民地時代との関係性を断ち切ることによって、90年代の読者（消費者・受容者）の様子をより正確に考察できると考えられる。さらに、出版業界はローカルの文化や知識の伝承の任を負う特殊な業界と見なされているがゆえに、90年代の日本現代文学ブームという、これまでにない積極的な外来翻訳書の導入に対して、さらなる時代的解釈が必要とされる。そこで、翻訳書の導入と受容をめぐる、公的メディアにおけるイメージの形成を、大手新聞『中国時報』の読書情報欄「開巻週報」に取材して考察する。そして受容の実例として、村上春樹の作品と愛読者を中心に分析を行う。最後に消費の実態（ベストセラーランキング）を検討し、グローバル化に進む台湾の文化空間における〈台湾ブランド〉の樹立にみられるローカル化の方向性を検討する。

本論文は全6章から構成されており、新聞記事の全タイトルやベストセラーランキングに基づいて作成した表とアンケートの調査結果を示すグラフなどの参考資料は、全て本文の後の付録にまとめて掲載する。ここで、論文の構成について簡単にまとめる。第1章では、台湾・日本間相互の経済状況と政治情勢の変化が文化空間に与えた影響を論じる。トレンド・ドラマの導入による日本大衆文化商品の流行から日本ブームの形成まで、本論文の背景となる台湾の現状を紹介する。第2章で本研究の問題意識、研究の枠組みおよび手法について述べる。グローバル化する文化現象は、アメリカの大衆文化を基調とするローカルの文化空間の変容をもたらす。しかしながらその変容は、ローカルが外来文化財を無抵抗な状況で受け入れるのではなく、外来文化財の導入および市場化する取捨選択が、ローカルの企業を初め受容者も含めたローカルの主体性の発揮として捉えることができる。それは90年代にみられる新しい

形態のグローバル化である。そこで、ローカル性が各地のグローバル化するプロセスの一環として強調されるようになることも考えられる。第3章では台湾の新聞メディアにおける日本の翻訳書に関する記事を分析していく。90年代の10年間にわたって掲載された書評、読書と出版情報から、台湾内部における日本の翻訳書の受容にみられる階級性の相違が浮上する。さらに、コーナー別記事掲載数の推移から、〈日本商品〉に対して台湾文化空間の用いる消費の戦略がうかがえる。第4章では、受容の実例として、90年代の台湾において最も人気が高かった村上春樹を取り上げる。同時代作家というような眼差しによって、村上から〈日本〉という要素が取り除かれることがわかる。したがって、台湾の文化空間に受容されていくにつれて、台湾的読みの重要視と〈日本的〉という要素の希薄化が起こっていることが明らかになる。さらに第5章においては、ベストセラーランキングによる消費の実態に関する検証結果について分析を行う。台湾の文壇における読者の人気傾向から、台湾読者に嗜好されうる日本の翻訳書が適宜にメディアの報道により導入され、消費の拡大を狙うことがわかる。その結果を、村上春樹受容から見ることで読者の読書行動、および日本人作家に対する受け入れ態度と合わせ、台湾ローカルの主体的な受容システムを明確にする。以上の考察にあたっては、必要に応じ、台湾出版業界の実態とメディアの連携によって構築される文化空間という受容背景の変化についても随時説明を行う。

グローバル化のもたらした世界的規模の政治・経済変動に左右されるローカルの市場経済が、国際化に応じながらも外来文化とローカル文化の折衝を調節し独自の発展を見せている現状では、さらなる政治・経済への注目が必要とされる。本論文の締めくくりとして、外来文化財による市場開拓と受容との関係の今後について、台湾観点の重要性と将来性を見極め、第6章で文化財の受容を取り巻く文化企業と政治・経済の関連性について述べていきたいと思う。

論文審査の結果の要旨

90年代の台湾における日本文化の受容については、これまでアニメ、漫画、トレンドィ・ドラマなどが注目され、種々の研究がなされてきた。許均瑞氏の本論文は、そうした視聴文化ではなく、日本の翻訳書という日本文化財に着目し、その受容の様態を多面的な視点から考究し、広範なコンテキストからその実態を解明しようとしたものである。そして、日本の翻訳書の受容において、多層的な局面が構成されていることを実証的なデータを基に明らかにし、さらには、外来文化財を取捨選択する際に存在する台湾内部におけるグローバル化への対応の様態に主体性が見られる点についても考察されている。

第1章では、翻訳書の受容の背景として、90年代のトレンドィ・ドラマ人気を中心とした日本大衆文化の広範な受容は、「日本文化空間」とも呼ぶべき日本文化の受容空間を現出させたと指摘し、こうした文化空間の展開を新興中産階級による消費社会の形成とも関連づけて分析している。そして、最近の新たな傾向として、受容者側の理性や主体性がしばしば議論されていることを指摘し、本研究のテーマである、翻訳書の受容を探求することを通して、文化受容の現代的な様態の考究へと繋げている。

第2章では、本研究の視座を説明し、文化のグローバル化と均質化という視点からローカルの受容システムの形成と存在を探求する先行研究の観点を取り上げている。そして、日本の文化財を導入することを、グローバルな文化現象との接近・接触というローカル文化空間側での文化構成の問題と見る本研究の枠組みを提示している。

そして第3章では、翻訳書の受容に関する具体的なデータに基づく分析の第一段として、台湾の大手新聞『中国時報』の読書情報欄「開巻週報」の88年から99年までの掲載内容が詳細に検討され、コーナー別に見て、知識人の所見（書評コーナー）、日本の出版業界及び日本の世相（世界書房）、台湾における日本の翻訳書（上記以外の部分）というように、受容（あるいは導入）の3つの局面が同じ「開巻週報」の中で観察されることを明らかにしている。このような分析を通して、許氏は、ローカル・メディアによる、「知的な」翻訳書の主体的な導入のプロセスを顕在化している。

第4章では、「開巻週報」においても、またベストセラーランキングにおいても、最も言及の多かった村上春樹の受容に絞って分析が行われる。村上は、「村上的」という流行語を生み、「村上ブーム」という社会現象さえ起こした作家である。本章では「開巻週報」における村上に関する言説を検証することで、村上受容の一つの局面を明らかに

している。続いて、最も顕著に愛読行動が現れている村上の公式ホームページを考察し、また村上愛読者を対象に行ったアンケート調査によって、村上受容のもう一つの局面に迫っている。

第5章では、日本の翻訳書受容の市場での実態の把握を、台湾最大手の金石堂書店のベストセラーランキングに求めている。そして、その結果と照合しながら、台湾読者が嗜好する日本の翻訳書の傾向からメディアの報道による導入・拡散効果を分析している。そして、その結果を、村上受容から見ることのできる愛読者の読書行動及び日本人作家に対する受入態度と合わせて、台湾ローカルの主体的な受容システムを明らかにしている。

第6章では、台湾における日本文化財の展開を見るもう一つの重要な視点として、これまでの検証と出版市場のグローバル化への動きとを合わせて、ローカルの市場経済が、国際化に応じながらも外来文化とローカル文化の折衝を調整し独自の発展を志向している姿が描かれる。

以上、許氏の本論文は、グローバル化時代における外来文化の受容という大きなテーマに関して、台湾という一つの地域を取り上げ、特別な歴史的・地政学的な関係にある日本の翻訳書という一つの文化財に関して、その受容の様態を、多面的かつ重層的に記述し、この分野の研究に貢献しうる独創的な研究となっている。また、大手新聞の読書情報欄やベストセラーランキングやホームページを広範に分析し、さらには村上読者を対象としたアンケート調査を実施するなど、実証的なデータに基づいて現象にアプローチしようとしている点でも高く評価される。具体的な作品の特徴や読者の受け取り方等の視点を取り入れる必要があるという指摘もあるが、そうした点は今後の課題として持ち越したとしても、本論文はこの分野に大きな寄与をなすものであり、博士（言語文化学）の学位請求論文として十分に価値あるものと認められる。